ひげのスコープ！
Scope of beard

QR

きょうようと きょういくのままに ⑦

東京学芸大学名誉教授　**篠原　文陽児**

突然ですが、QA（キュー・エー）とは？

Q&A（キュー・アンド・エー）ではありません。筆者が初めてこの言葉QAを、イヤというほど悩ましく、耳にしたのは、実は、2002年から2003年かけての頃。ちょうど、ユネスコ・アジア太平洋地域教育局に勤務し始めて数ヶ月後のこと。

誰しもそうであろうが、筆者は筆者特有に、情報を選択的に処理している。その結果、昨年から今年にかけ、このQAが特に頻繁に目に飛び込んできて、度重なるようとなり出かけていくこととなった。講演会あり、セミナーあり、いずれも特に教育の『Q』にかかる、今と将来を見据えた企画と内容で、どれも盛況であったと思っているQR。

教育の領域で、このQが、こうまでして頻繁にそして身近なことがらとして捉えられ語られるようになったのは、WTOが教育のQの議論に乗り出したからである。WTOは、筆者には、クルマやコメなどのモノの流通にかかわる国際機関World Trade Organization、世界貿易機関であると、その当時までは、思っていた。

つまり、教育を専門とする機関は、それまでにも教育界の中でQを考えてはきていた。例えば、日本には文部科学省令大学設置基準があり、最近の話題でいえば、各都道府県には、学校設置の認可等の基準などがある。諸外国でも大差はない。

しかし、当時、教育はモノ、教育は売買の対象と考える経済界の潮流が一気に加速し、WTOが動いた、と考えることが自然である。その引き金となったのはインターネットの普及と拡大であり、WTOは、およそ1999年から2000年にかけ、高等教育と成人教育や生涯学習に関わり、インターネットの影響調査を各国に打診、回答を収集し始めていた。日本政府からの回答は2002年３月15日にWTOに届いている。

モノが量的に拡大すれば、質が良くて安いモノに購買活動が傾くのは、しごく当然。グローバル化の進展は、モノの流通のみではなく、ヒトも、カネも、情報も、いずれも往来を含め激しくさせ、拡大させる。教育も例外ではない。

冒頭のQAは、そう、Quality Assurance、『質』保証。特に、2002年頃、それまで通信教育や遠隔教育で、専門家とその機関が叡智を集め責任を持って展開し発展させてきた生涯学習や大学教育の教材が、ｅラーニング教材として、ネット上で量的に拡大し、いよいよ質が喫緊の課題となった時期。

一方、特にヒトの往来では、例えば大学。入学後の大学生の海外留学や国内大学間での移動を容易にする一つ、単位互換はさほど進んでいない。ネックは質の特定とその困難さと格差。多種多様な因子による国内外の大学ランキング調査がある。

国内大学ではGPA（Grade Point Average）の導入も加速している。日本学術会議では、学問と教育の分野別参照基準の策定と公表が進行。大学教育の標準化ではないに違いないが、悩ましい。

視聴覚教育が、進展著しいICTを駆使し、特に生涯学習等の領域で、映像と音声を中核とするｅラーニングに舵を切りつつあり、21世紀を越え22世紀を生きる子どもたちの学習を含めた教育実践の質特定と確保、そしてその向上に寄与すべき期待は、なおいっそう大きくなっている。